

(2014年2月3日掲載)

血漿分画製剤に関する調査報告 (2013)

日本血液製剤協会（理事長：宮本誠二）では、医師を対象に血漿分画製剤の意識調査を実施し、その結果を集計・解析した報告書を作成しました。

【背景】

血漿分画製剤は、他の治療法では代替できないものであり、医療上必要不可欠な医薬品である。しかしながら、血漿分画製剤を取り巻く市場環境は使用対象患者数が限られていることに加え、継続的な薬価引き下げ等の影響もあり、ここ数年は一定の範囲内で推移している。今後も事業を牽引するほどの新規製剤の開発は期待できないことから、厳しい事業環境が続くと考えられる。現状の認識／満足度を確認するとともに、今後の継続的な供給に向けての医師の声を収集し、今後の協会としての情報提供活動につなげる。

【目的】

今後の血漿分画製剤の安全性確保と安定供給の両立を図るために、下記の点を確認する。安全性／安定供給に対する満足度、安全性・安定供給に対する取り組みへの認識・評価、血漿分画製剤の継続的な供給を望むか

【調査方法】

1. 調査期間：2013年4月3日～4月10日
2. 調査地域：全国
3. 調査手法：インターネット調査
4. 調査対象：臨床医
5. 対象者条件：100床以上の施設に勤務している医師、疾患問わず通常の1ヶ月間に患者を診療した医師、疾患問わず最近6ヶ月間に血漿分画製剤を患者に投与した医師
6. 有効回収数：594
7. 調査機関：株式会社アンテリオ

【調査結果】

1. 血漿分画製剤の安全性に対する取り組みは 89%が評価すると回答し、97%が継続した取り組みを望んでいた。
2. 血漿分画製剤の安定供給に対する取り組みは 33%の認識であったが、

81%が評価すると回答し、96%が継続して安定供給に対する取り組みを望んでいた。

3. 血漿分画製剤の安全性に対する取り組みは 57%の認識であったが、そのうちの 95%は取り組みを評価すると回答していた。
4. 今回の調査対象者の中では、77% (458 人) の医師が難病・希少疾患患者に対する使用経験があり、それらの医師は 80%が継続した適応拡大を望んでいた。